

[教育講演 I]

わが国におけるパラリンピックの父——中村 裕博士

小林 晶

福岡整形外科病院

1964年第32回東京オリンピックと同時にアジア初のパラリンピックが開催された。この競技大会をわが国に誘致する先頭に立ったのは中村 裕博士(以下敬称略)である。この事実の認識は少なく、やと2018年8月にNHKがドラマで紹介したに過ぎない。顕彰の意を含めて医学史に名を留めたく偉業を紹介する。

中村は1927年大分県に生まれ、1952年九州大学医学部専門部を卒業、同大学整形外科に入局し、主として筋電図と当時本邦では未だ関心が少なかったリハビリテーション(以下リハ)の研究を始めた。元来、機械いじりが好きで器用でもあり、熱中する性格だったので直ぐ頭角を現し、1960年にはリハの教科書を出版する。1958年国立別府病院整形外科医長として赴任した。研修時代に学んだ九州労災病院の欧米のリハ事情に精通していた内藤三郎院長から英国のSir Dr. Ludwig Guttmann(以下Guttmann)の脊髄損傷(以下脊損)の業績を紹介され、強い示唆を受けた。中村は1960年2月から英国Stoke Mandeville Hospital(S.M.H.)のNational Spinal Injury Centreに留学する。ここには1948年以来Guttmannが世界で初めて脊損患者の治療と社会復帰のためのスポーツ導入を行っていた。ここで直接指導を受けたことが中村の半生を変えたのである。

S.M.H.では脊損のリハにスポーツを用い、陸上競技場など多数の施設を備え、1948年Stoke Mandeville Games(S.M.G.)を最初に開催し、1952年からはオランダが参加して国際競技大会の組織ができていた。医療面では回診を例にとると理学療法士、作業療法士、医療体育士(Remedial gymnast)、ソーシャルワーカー、養護教師が医師、看護師と共にグループで行っていた。組織的なスポーツ活動は専門家を交え、障害を考慮して行われ、重度障害でも6か月の訓練で85%が社会復帰するという、瞠目すべき成果を知った。復帰には残存機能の強化を楽しくスポーツで行うという、わが国の医学界での認識の甘さに中村は衝撃を受けたのである。1960年ローマで開催されたオリンピックを機に、第9回S.M.G.が第1回パラリンピック競技大会として開催された。

S.M.H.での中村の行動はGuttmann以下職員も注目的で、患者の診療はもちろん医療、リハ、スポーツ活動を始めとし、必ずスケジュールを正確にこなし、早朝と夜間には倉庫に蓄積された資料の山に埋もれながら調査を行った。これは診療記録、検査成績(含病理組織)、X線フィルム、予後調査を含めた膨大なものであった。演者は1962年7月第11回国際S.M.G.に中村と日本からの初めて参加の2選手と1ヵ月間起居を共にしたが、早朝から深夜までの活動で中村の睡眠時間は極めて少なかった。

勤勉な中村の態度はGuttmannを動かし、1964年の東京オリンピックで第16回パラリンピックの開催を慫慂されたのである。その後のわが国での中村の行動は目まぐるしく、政府を初めマスコミ、財界への働きかけを直接行った。しかし、当時の世間の目は厳しく身障者のスポーツ参加など狂気の沙汰とまで極言される始末であった。それに診療の傍らであったから、九州から東京、関西の距離、当時の交通手段を考えても、心身に亘る疲労は著しかった。国際的交渉・交流まで含めると常人では考え難い行動範囲であった。1964年からは別府整肢園園長を兼任することになり、肩にかかる重荷は増すばかりであった。元来、目的を作って歩いてゆく、立ち止まらない、考えついたら即座に行動する、原点に立ち本音で交渉する、熱意と勇気で体当たりする、常識破りの誇りを受けても常に突破して怯まず開催を実現し、1964年の大会には選手団団長として参加し成功させた。大会後、詳細な報告を行って今後の身

障者の社会復帰の指針を示した。

中村はその後も日本パラプレジア医学会，国際脊損学会を主宰し，極東・南太平洋身障者スポーツ大会，身障者技能競技大会，国際身障者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会，大分国際車椅子マラソン大会，「太陽の家」などを創設した。しかし，肝炎に罹患し 1984 年 7 月 23 日肝癌のため惜しまれながら死去した。享年 57 歳であった。

今日のわが国のパラリンピック競技大会の発展をみるとき，可能な限りのエネルギーを費やし本邦にこの競技の礎を創ったのは勿論，身障者の社会への参加を実現した功績は賞賛に値するものである。